慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	支那思想のフランス西漸(後藤末雄著, 第一書房刊行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.155(735)- 158(738)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ンバー大百科辭典に據つてゐることは先生自身も認めて居られる。卽ちフランス大革命も我が維新も、均しくこの大辭典に負うところあるは偶然の一致である(二二頁)。本塾の占部博士にして初めて到達し得べき至境であらう。

以上は全卷を埋むる珠玉のほんの一粒に過ぎない。若し夫れ事件の進展を裏書する挿話に至つては、ジロンド黨黑幕の領袖ローラン夫人が王妃に對する個人的惡感から共和政治の創設を企て(四二—三頁)、ナポレオン三世の皇后ユウゼニが皇帝を驅つて普佛戰爭を惹起せしめ(二七三頁)、マッヂニの著書に感奮せるボーディエラ家兄弟が志成らずして同志と共に銃殺されたが能く「青年イタリヤ」の意氣を示し(二二〇頁)、ビスマルクが一八九八年ハンブルグに於て近東を導火線にやがて世界大戰の勃發すべきを豫言した(五三九頁)物語の如き、新に寄たる事實は枚擧に遑なく、讀者をして覺えず一氣に全卷を讀了せしめずには措かない。

從つて本書は只單に高等學校程度の教科書又は參考書としてのみならず、廣く世界の大勢を知らねばならぬ今日何人にも一讀を奬めたきものであり、三十五頁の索引付に到つては懇切の限りと言ふべきである。而して博士が他日を約束せられたる更に「深奥なる研究」が、一日も早く上梓せらるゝを鶴首する所以である。

價、學生版六圓、上製七圓。(伊藤政寛)

支那思想のフランス西漸(後藤末雄著 第一書房刊行)

かつて、アンリー・ド・レニエ其の他フランス文學佳什の飜譯者として幽婉妍美の筆致を見せ、また新進作家として谷崎潤一郎氏と共に、大正改元當時の騷壇の華たりし後藤末雄氏が其の後十數年間に亙る全く學者としての潛思攻究の生活は、此に學位論文支那思想の西漸となつて榮譽ある成果を結んだのである。

今また本書が近刊されたことは、氏を知るものにとつて二重の欣幸といはなければならない。

本書は序說、本論、結論を併せ六百頁以上に亙る浩瀚な論文である。先づ序說に於て、博士は支那の國民性、商工事情、首都の宏大、皇居の壯麗のみかは、支那の工藝美術、特に陶器、漆器、絹織物の製造狀況の方面をも紹介したかのマルコ・ポーロの「東邦見聞錄」より筆を起して、支那と歐羅巴との接觸、支那と佛蘭西との接觸に就て略述されてゐる。

次に本論に於て、第一編佛國耶蘇會士の淸朝に於ける活動と其の學術的業績の題下に、羅馬法王の佛國耶蘇會士支那差遣、ルイ十四世の佛國耶蘇會士支那差遣、康熙帝の西歐科學研究と「皇輿天覽圖」の測成、康熙帝と天主教の公許、「儀禮問題」と康熙帝の態度、雍世帝の禁教事情と其の眞因等に就て敍述されてゐる。

康熙帝が學問の熱愛者として、將又外來文明の研究者として歐洲に鳴り響くに至つた事情、西歐學僧がその科學上の功績により布教の便宜を得た事、又西歐人の康熙帝觀等を博士は敍べられてゐるが、寔に興味津々たるものがある。次にブーヴェ師の康熙帝觀を引用しよう。

この君主の精神的美質は肉體的美質よりも遙かに優れてゐ

る。この君主は生れながら世界最善の素質を具へてゐる。俊敏な才智、立派な記憶力、驚くべき廣汎な才能、有ゆる種類の事件に耐へて、且つ大計畫を企て、之を統率し、之を達成するに適切な意志の力を持つてゐる。その性情は悉く高尚であり、大王たるに適はしい。皇帝の公正と正義とに對する尊敬、國民に對するその慈愛、その道義心、萬事、良心の命令に從ふ絶對的の克己心に對して、國民が如何ほど皇帝を讃美しても、未だその全幅を盡さない。そして吾人は、あれほど國務に鞅掌しながら、美術趣味にも亦、凡百の學問に對して勉勵される皇帝を見出して、驚歎を禁じ得ないのである。（百三頁）

師は有名な康熙帝傳を執筆して之をルイ十四世に獻呈したのであるが、此に引用した康熙帝觀によつても、師が如何に康熙帝に心醉してゐたか察知するに難くない。

次に第二編佛國耶蘇會士の自國に紹介せる支那の精神文明に於て、先づ佛國耶蘇會士の支那研究書目と東洋旅行家の支那記事の題下に、極東布教史上、紀念すべきル・コント師の著はした「支那現狀新誌」及びブーヴェ師の康熙帝傳等を擧げ、博士は前者を支那帝國の讃美者とするならば、後者は支那皇帝の歎賞者と言ふべきであらうといはれてゐる。また、かの佛國東洋學者デルブローの編纂した「東洋文庫」の內容を補足し、その謬見を訂正しようと企てたヴイドルー師、君側近侍の學僧として在朝し、康熙帝に西歐の自然科學を進講したジェルビヨン師、支那の古典、易經を初めて羅甸語に飜譯したレジス師、支那古典の中から聖傳の痕跡を求めんとするやうな冒險を敢行し、又支那の古典を讀破したばかりでなく、「趙氏孤兒」の如き雜劇を佛譯して名を馳せたプレマール氏、通鑑綱目を佛譯した康熙帝の學僧ド・マイヤ師、また、プレマール師、アミオ師と並んで最も漢語に熟達した耶蘇會士であり、殊に支那の天文に精通し、支那第一の古典、書經を佛譯したゴビール師、また、ヴォルテールの激賞して已まない「支那帝國全誌」を著はしたデユ・ハルド師等の業績に言及されてゐる。即ち佛國耶蘇會士の編述した支那研究の文獻を指示されてゐる。

支那に渡來した初期宣教師が大學、中庸、論語を飜譯したことを序說に於て一言された博士は、次に孔子教の譯書とその價値、佛國耶蘇會士の孔子教に對する評價、支那の家族制度と德治主義、支那の政治制度、佛國耶蘇會士の支那政治制度に對する鑑賞、支那に於ける自然科學の發達と其の停滯原因等につき、極めて示唆多き敍述をされてゐる。

次に第三編佛國一般知識階級と支那思想との接觸に於て、佛國一般知識階級の孔子教と支那道德とに關する感想につき述べられてゐるが、之に由て、吾々は如何に孔子哲學が當時の佛國知識階級の興味を惹いたか察知し得る。

次の第四編佛國思想家、特に百科全書家と支那思想との接觸に至つて、初めて本題に這入つた觀がする。博士は先づマルブランシュ、フエヌロン、モンテスキユー等の支那觀につき略述した後、五十頁を費して佛國第一の哲學者たるヴォルテールの支那觀につき詳細に敍述されてゐる。博士は先づ支那最古の文獻と稱されてゐる正史と五經とをヴォルテールが信賴してゐる二種の理由を指示し、次に支那人の技能及び政治組織に對する彼の見解、彼の孔

子觀等を明快に敍述し、終りにプレマール師の佛譯した「趙氏孤兒」に基いて創作したヴォルテールの悲劇「趙氏孤兒」の梗概を紹介されてゐる。要するに博士は、耶蘇會士に依て佛國に傳來された支那思想が如何にして、又如何なる點に於て、ヴォルテールと接觸し、また其の腦髓上に如何なる反映を生ぜしめたかを分析檢討されたものに他ならない。

次にルッソーの支那觀につき一言されてゐる。これは僅か四頁足らずの小篇で物足りない感を讀者に與へるが、これは恐らく資料の鮮少に因るのであらう。

次に頗る愼重な、隨つて公平な態度で諸般の支那文明を紹介し、之を批評したヂドロの支那觀を敍述されてゐるが、博士はヂドロの支那觀は他人の說を拜借して多少の潤色を加へたのみで、何等、獨創的內容を有しないと喝破されてゐる。終りにケネー、レイナル、マブリー等の支那觀に言及されてゐる。

第五編當時の辭典に現はれたる支那記事、及び第六編支那思想の佛國政治家及び東洋學者との接觸は附錄とも言ふべきものであらう。

博士は本書の結論に於て、第一傳道、第二支那文化研究の使命をルイ十四世に課せられた佛國耶蘇會士が果してこの使命を完全に果したか否かを檢討されてゐる。

以上は本書の大體の紹介に過ぎない。過日、東日紙上に於て德富蘇峰氏は本書を評するに當り、「惟ふに何者の寧馨漢か、能く此の好題目を捉へ得たる、記者は先づ著者に向て、其の好運を祝せねばならぬ。但だ慾を云へば、序說の支那と歐羅巴との接觸は餘りに概說に過ぎてゐる。太古から十六世紀に至る迄を、僅々十行の文字にてのうくわつしたるは、手柄と云へば手柄であるが、我等には聊か物足らぬ心地がする」と言はれてゐるが、これは蘇峰氏の思違である。卽ち支那と歐羅巴との接觸は十頁餘が費されてをり、氏が言ふが如き十行の文字を以て取扱はれてゐない。恐らくは次の支那と佛蘭西との接觸の記事を錯綜されたのであらう。又氏は「著者のヴォルテールの支那觀は、詳細を極めてゐるが、ルッソーの支那觀は、頗る簡單だ」と言はれてゐるが、これは既に一言した如く、資料が鮮いためであらう。但だ氏の評として敬服に堪へないことは、「本書の挿圖は前にも申した通り、何れも結構だ。但だ幾何學原本、海山仙館叢書本より複製したるが如きは、それでも差支はないが、折角明末の原刊本が存在するから、それを複製せられた方が、一層結構であつたらうと思ふ」と述べられてゐることだ。これは確かに本書の瑕瑾ともいふべきものであらう。

博士の文理は、少しも枯燥晦澁に陷ることなく、極めて流麗明暢、往年文名を馳せた人たることを思へば少しも怪しむに足りない。而もあらゆる艱難を排し、根本資料を涉獵して幾多の事實を世に報道した博士の功績は、蓋し新らしい鑛脈を掘りあてゝ、世に多くの暴富を送り出したものゝ下にをるものではない。

洋紙製本頗る華麗、幾多の貴重な挿繪と共に錦上更に華を添ふるの觀がある。

聞くならく、博士の淫するところは釣にありと。綸を垂れて汀渚に靜思する間の一大獲物として江湖に敢て本書を薦めること

は、強ち評者の私心とのみいはれようか。（宮島貞亮）

支那政治組織の研究（及川恒忠撰　啓成社刊行）

多年に亙り、支那の法政經濟を研鑽され、絶えず此の方面の指導啓發に力められた慶應義塾法學部教授及川恒忠氏が、其の研究の成果ともいふべき「支那政治組織の研究」を近刊されたことは、學界のため寔に慶賀すべきことといはなければならない。殊に、かつて、教授の講筵に列し、懇篤なる指導に浴した吾々後進にとつて、洵に欣幸なことゝいはなければならない。

本書は一千頁を越ゆる大著であつて、序説ともいふべき地理概説に於て、先づ支那といふ名稱より説きおこし、支那の位置、面積、行政各省、支那の地質、支那民族の起原、人類學的分類、人口統計、地誌等に言及されてゐる。これによるも、教授が支那の歴史地理に如何に造詣深きか、吾々は窺知することが出來る。人口の條で、「假りに人口增加の趨勢が流行病、饑饉、水害、動亂といふが如き事情に拘束せられなかつたとしたならば、乾隆三十九年以後百三十五年の間に於て、二億二千萬より三億五千萬に達した人口は或は四億を超過することが出來たかも知れない。併し此等の原因が彼此相俟つて人口增加の趨勢を阻止したのであつて、恁うした特種の事情の儼存することは支那の人口を觀察する場合に雲煙過眼するを許さぬ所である」と教授は述べてをられるが、これは寔に至言といはなければならない。支那有數の大新聞「大公報」は最近、中國人口問題の題下に、動亂、洪水、饑饉等のため、一億の人口を失つた。人口問題は外交問題より刻下の重大問題であるといふ意味の記事を掲げてゐるが、強ち誇張した言とのみいはれまい。何となれば、近年の洪水は日本本土と等しき廣大な地域に亙つてゐるからである。兎に角假りに五千萬人失はれたとしても、國家の問題として、確かに重大な問題といはなければならない。余は教授の卓見に接し、益々此の感を深くせざるを得ない。

次の民國政治史篇に於ては、共和成立と袁世凱の時代、安徽派の消長時代、奉直二派の抗爭、段執政府、及び國民革命及び國民政府時代を詳述し、支那憲法史篇に於て、先づ日清戰爭の失敗と嗣いで起つた西歐各國による租借地の獲得とが支那の近代的覺醒を促したことを述べ、清末に於ける康有爲、梁啓超の變法自疆策、張之洞、劉坤一の改革上奏、孫文の民主革命、或は戊戌政變乃至團匪事變、又は憲政考察大臣の海外派遣等紛々として捲き起つた革命前後の事象に就て論述され、また、民國國會史篇に於て、教授は專ら國會の變遷を述べ、支那憲政史の一班を窺知するの用に資せられてゐる。

次の民國政黨史篇に於て、先づ資政院時代の政黨から國民黨改組前までの經過を述べ、次いで、第九章以下で國民黨の改組並に其後の狀況を明かにし、最後に中國共產黨にまで言及されてをり、民國政治組織篇に於ては、北京政府時代、國民政府時代の中央政府及び地方政治の機構を詳述されてゐる。また民國司法制度篇、民國陸軍篇、民國海軍篇、民國財政史篇等に言及されてゐるが、吾々は隨所に教授の卓見に接する。